SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

中部支部巡検会の報告：藁科川の源流を訪ねて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, みつ子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025154

静岡地学　第79号（1999）

中部支部巡検会の報告
～藁科川の源流を訪ねて～

松本みつ子*

平成10年10月10日の体育の日、会員9名と高校生2名は牧ケ谷に集合、清流として名高い藁科川の源流、福養の滝を目指しながら、流域の地質や歴史を探る巡検に出発した。案内者は長島会員。

①牧ケ谷・十枚山構造線

牧ケ谷橋の上流150mにある木枯の森は、竜爪層群（新第三紀中新世）の粗面岩からできている。この木枯の森の北側を十枚山断層が通り、牧ケ谷の陸閘の西側を経て、赤目ケ谷に抜けている。牧ケ谷では北側の瀬戸川層群（古第三紀）と南側の竜爪（大崩）層群の境界（十枚山構造線）の露頭が産女川の対岸にある。植生におおわれていたが、竜層層群の粗面岩の露頭と、破砕帯を挟んだ瀬戸川層群の下部の石灰岩を含む部分が少し見えていた。木枯の森の生成には十枚山構造線と藁科川の蛇行がかかわり、藁科川の右岸の山地から切り離されて小島になった。

②大原から富厚里の小扇状地をみる

藁科川の右岸をさかのぼると小瀬戸を通る。ここでは第2東名の橋の工事が進み、富厚里から川を渡って大原の水見色川の土手の上から富厚里の方をみると、中央に「だいらぼう」が構えており、その左と右の小布杉峠から2つの谷川が小扇状地をつくり、その2つの貝を伏せたような地形になっていた。長島先生が約20年前に、この扇状地を映した写真を見せてくださった。その頃は、今、工場や商店が建っている土地も、全て水田でさえぎる物はなく、くっきりと扇状地の富厚里が写っていた。

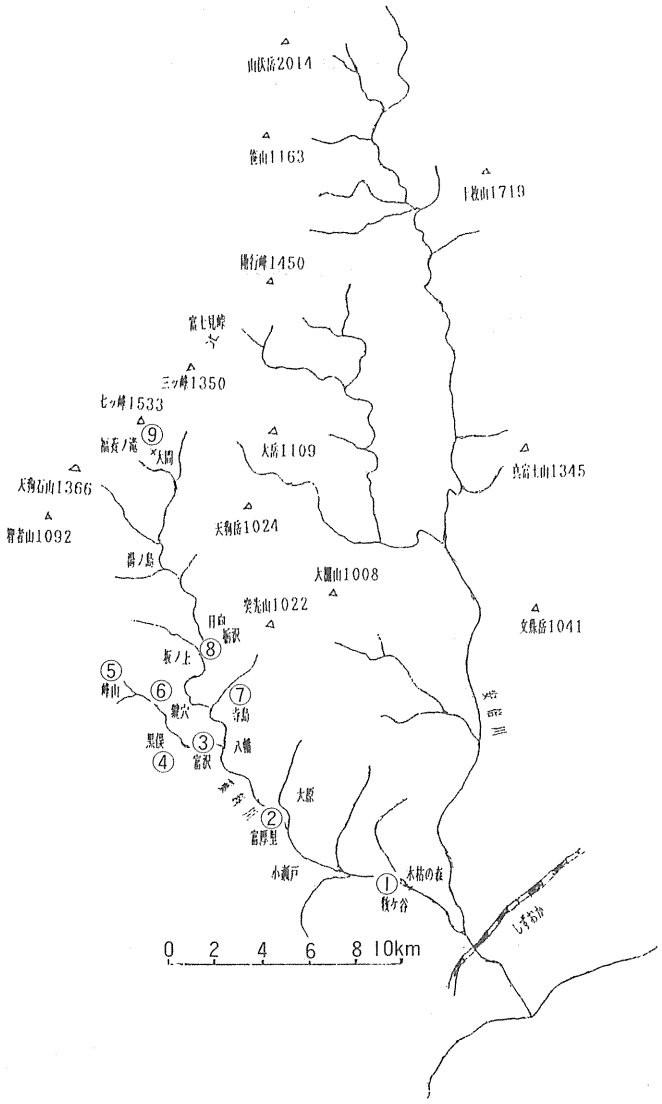
③富沢・明神山の開鑿記念碑と珪質砂岩

国道362号線が富沢の集落に入ると、右側に小丘の明神山がある。その北側の小道を入っていくと3枚の石碑がある。右に開鑿60年供養碑、左側に開鑿100年記念碑があった。この広場の先は急な崖となり、藁科川の青緑色の淵があった。対岸には厚い10mはあろうかと思われる灰色の砂岩の崖が切り立っていた。この淵は澄んだきれいなところなので、私は以前、毎夏のように子供をつれてこの川原で川遊びを楽しんだ。しかし、この碑にある明治の歴史は知らなかった。昔、藁科川はこの明神山を取り巻くように流れ、富沢の村の田畑に水を供給していたが、再三、洪水を起こし、村に大被害を与えた。そこで村の代表たちは中央より技術者を招き明治14年4月より2年にわたり硬い砂岩層を切り開く大工事をして川の流れを真っ直にし、短縮した。そして村は水害から救われた。この工事を完成させた人々に感謝の気持をあらわすために供養塔が建てられたのであろう。切り開いた所が今の淵だ。この淵の両側は瀬戸川層群の珪質砂岩で硬く、丈夫で風化にも強いので、今から390年前に、こ

＊〒424-0813　清水市宝町6－15

の砂岩が富沢、富厚里、小瀬戸で採掘され駿府城の石垣に使用されたという。(小野田護:「駿府城の石垣のふるさとと刻印」)

ダンプカーや掘削機等の大型機械類の無い慶長の昔に、家康の命令を受けた大名のもと、膨大な数の人夫が全国から駿府に集められ、夜も昼も激しい労働を強いられ、10ケ月程の突貫工事で城が完成したそうだ。本書によると、この富沢や富厚里、小瀬戸のこの砂岩層の岩盤に、各地の担当大名の刻印やくさびの跡が残っているそうだ。岩盤に多数のくさびを入れ、100〜500 kg に切り取り、当時、豊かな水量だった藁科川で筏に載せて流し、弥勒から陸路を梯子のような大型のかつぎ棒に石をくくり付け、大勢で城まで運んだということだ。運び出された石の数は10万個程と推定される。当時の人々が知恵を出し合い、大がかりな方法で石を運搬した様子が、築城屏風に見事に描かれている。この静かな砂岩の川岸にも約390年ほど前には、多くの石工たちのくさび穴をうがつ音や石を割る音が響き、人夫のかけ声やよどめき、監督の罵声等で騒々しかった歴史に思いをはせた。



巡検案内図

④下相俣・笹山構造線

八幡から左折して下相俣の集落の小さな鉄橋の下流側に瀬戸川層群と四万十層群の境界である笹山断層が見られる。川床の薄い砂頁岩層(瀬戸川層群)を細粒礫入砂岩(四万十層群)がおおうように接しているのが見られた。笹山構造線は見掛け上大きな断層には見えないのは地下深くで形成されたためであろう。

⑤峰山・大ヒイラギ

久能尾から右折して362号線を登り、峰山の集落で県指定天然記念物「大ヒイラギ」を見た。根元の周囲が1 m程ある巨木で、古いため、葉にトゲがなく丸い形だ。うっそうと葉を茂らせ貫禄がある。「ヒイラギは、新しい若いは葉にはトゲがあるけど、古い木になると、トゲがなくなり丸くなるのでは」と言う兼高さんの言葉通り、古木を見上げると小枝の若い葉には、確かにトゲがあり、普通に見られるヒイラギの葉であった。

⑥鍵穴・笹山断層

八幡に戻って、藁科川の本流をさかのぼる。旧清沢東小学校の崖はコンクリートが吹き付け

られいるので見えないが、この崖の東端あたりを笹山断層が通っているという。

⑦寺島、坂ノ上・発電所

藁科川は渓谷状になってきた。寺島では昭和3年に建設された中部電力清沢発電所とその水圧管を見た。この発電所の水は上流の坂ノ上の集落の手前にダムがあり、その左端に取り入れ口があって水は1,716 mの水路を通り、水圧管を下って発電に使われる。500 kWの電力を供給している。

坂ノ上でも中部電力大川発電所を外から見学した。この発電所は明治44年に駿遠電気会社(後の静岡鉄道）が静岡市から水利権を買い取り建設され、この電力を使って大正9年に静岡の茶町から清水港まで輸出用茶の運搬する鉄道が電化された。ここは5 m四方の建物で無人化されており、現在でも出力250 kWで大川地区に電力を供給している。100年程前に、この山奥に発電所を建設し、その電力を山々を越えて遙か静岡・清水まで送る設備を造るとは、昔の人々の熱意に驚かされる。

⑧栃沢・聖一国師誕の地

和田で藁科川をわたり右の細い道を登っていくとやがて栃沢の集落に入る。その一番奥の旧家らしい広い建物と庭と植木のある家に着く。聖一国師の生家、米沢家である。聖一国師は今からおよそ800年程前、この米沢家に生まれ、才能に恵まれていたので寺に入り、数々の高僧に教えを受け、33歳の時宋に渡り、仏典の研究をした。また、宋から茶を持ち帰り、駿河を中心に茶の栽培を広めたということだが、詳細はよくわかっていないようだ。家の前には「聖一国師生誕の地」の碑と佐々木信網の詩碑が建てられ、その横にはトチの木や年代を感じさせるカヤがあり、実が落ちていた。家の裏には見事な枝振りのシダレザクラがあり、春の開花時期には見物客やカメラマンで賑わうとのことだった。白いソバの花と澄んだ空気を楽しみながら、ここで昼食をとった。

⑨大間・福養の滝

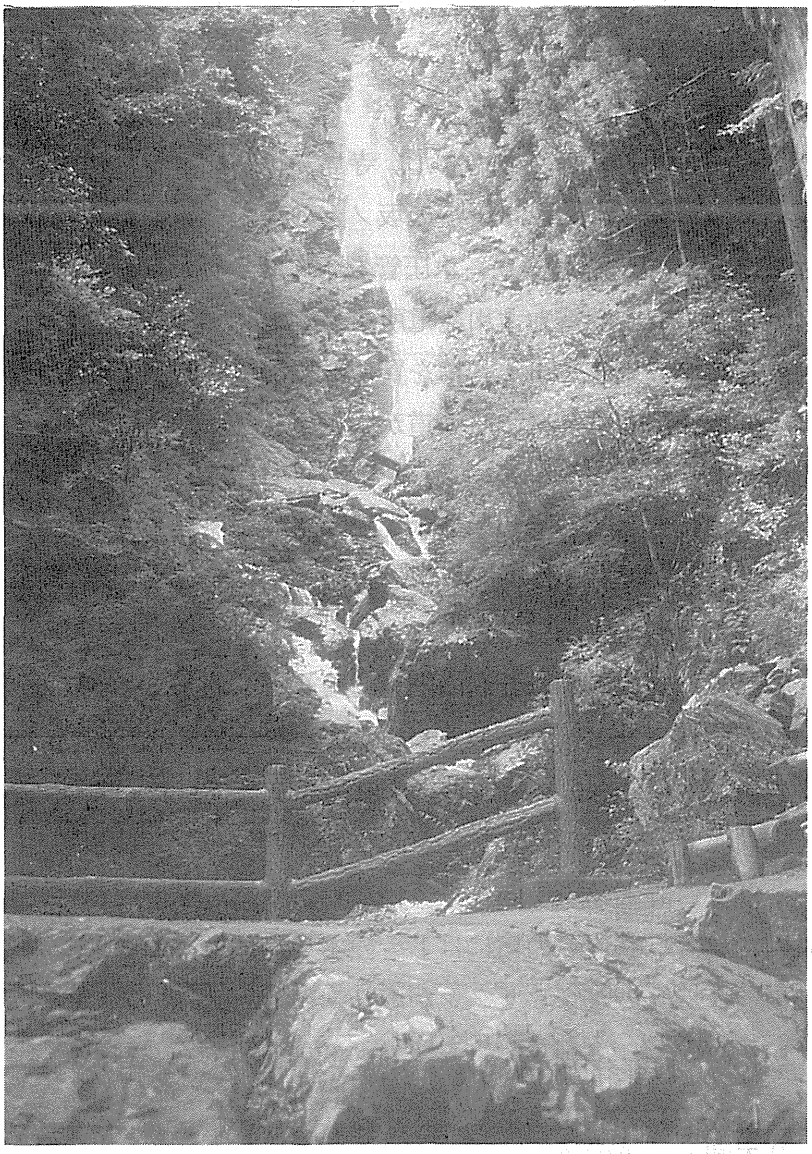
和田の橋に戻り、日向へ向かって行く。すぐに大川発電所の取り入れ口があり、コンクリートダムの端に魚のそじょう(主に鮎)を助けるための魚梯が幅2 m、長さ7～8 mの段階状に造られていた。

日向の小、中学校の隣の旧家の門をみてから一路、湯ノ島へ向かう。湯ノ島温泉を過ぎ、崩野入口から右折して道は急なヘアピンカーブをいくつも繰返し高度を次第に上げた。途中にレンズ状に引き伸ばされた岩石が入っている四万十層群の地層が見えた。全体に複雑に曲がりくねり、途中で切れたりしていた。

この辺りからは、山からしみ出た水が道に流れて、コンクリート舗装された道は寒くなると凍結し、スリップ事故につながるので危険な所だそうだ。先生が「右手の山の頂近くに白い筋が見えるから見てごらん」というので、一同、目を凝らしてみると、昨日の雨で水量の多くなった福養の滝の白い筋が濃い緑の中にはっきりと見え、一同感動した。大間の集落を過ぎて滝の駐車場に着く。杉や桧の林の中の道を5分程歩き、岩場を降りると滝の展望台に立つ、「ドォー」と水の落ちる音がひびき、見上げると黒い岩壁を背に見事な量の水が落ちてくる。うす暗い森の中に、このような大きな音と水の世界があり、何か神秘的な雰囲気があった。ここで参加者全員の記念写真を撮った。

滝についての説明の立て札があり、この滝は全長135mで、2段になっており、上部を雄滝、下部を雌滝という。このあたりの岩石はほとんどが四万十層群(中生代白亜紀末)のスレート、黒色頁岩で、一部には凝灰岩も見られた。長年、見てきた静かな藁科川の源が、このような猛々しい滝から発せられていたとは驚きであった。

この福養の滝に源を発し、多くの山々からしみ出た沢の水を集め、次第に水量を増しながら、四万十層群から瀬戸川層群の岩層の川原を流れ下り、やがて幅の広い藁科川となり、安倍川と合流する、流域面積約176 km²の川。流域の人々の生活を古くから支え、様々の時代の歴史を育んできたこの川に深い愛着を覚えた。また、日向の旧家の茅葺きの門が今も当時のまま保存されている事にも、山間地の人々が自分の歴史を大切にしている心の豊かさ、誇りのようなものを感じた。



H10.6.27　福養の滝

謝辞：今回の巡検計画資料を準備してくださった桜井美津夫会員、永年にわたり各地を調査し、その豊富な知識で案内をしてくださった長島昭会員に心より御礼申しあげる。